

思います。

武田作十郎厩舎に脈打つスピリットが、武豊に好影響を与えたことは疑いない。

河内洋は兄弟子として次のように評した。

「素直で礼儀正しいね。でも、もつとやんちゃな面を出してもいいかも知れない。」

「何と言っても一年目なのだから、今年的好調を来年へいかにつなげるかが課題だろう。」

「今は先行するのが得意だろうが、そればかりでなく自在に騎乗して、先入感を与えないようにすることも必要だろう。」

「兄弟子の突き上げ？ そりゃあ、複雑な心境やね。まだまだ自分も引退するわけにはいかないからねえ。」

彼の笑顔の裏側に、これからも互いに騎手として競い合う決意の美しさが見て取れた。

父であり、厩舎の先輩そして騎手の先輩でもある武邦彦調教師は言った。

「武田厩舎というチームワークのある環境が、まず大きかったと思う。河内洋そして佐藤、牧村助手の存在もね。」

「デビュー前には、他の騎手に迷惑をかけずに乗って来て欲しいとだけは思った。今年の豊の成績は、よその調教師に認められて、乗せて貰えることに尽きる。しかし新人で勝ったからと言っても、来年もこの成績であるという保証は何もない。」

父として？ 豊は、自ら好きな道を選んで進んだんだ。彼が騎手であることは、もう私には関係のないことなんだ。

春、競馬学校の卒業式では、柱の陰からぞつと見守るように武豊の騎乗供覧を見ていた武邦彦調教師。しかし今では彼は、子息武豊に対して、プロ対プロとして接するように努めているのだろうか。

客観的な立場から、大阪スポーツの米原記者に武豊評を聞いてみた。

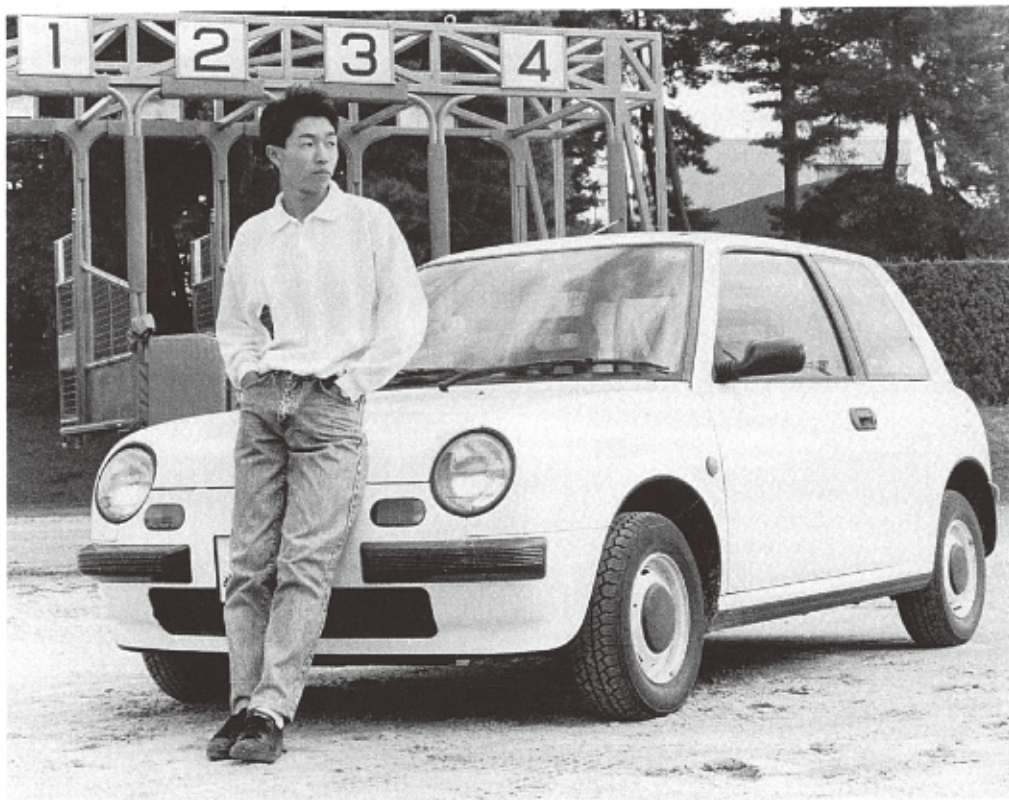
「競走馬で言えば、まさにサラブレッドやね。育ちがいい。つまり何事においても余裕がある。それに勝負の機微をよく知ってるわ。一度関東に行って、関西とは違ったもつと厳しい競馬を経験してみる

のもいいことやろうね。

☆ ☆

人をもスツと彼の世界に誘う引力のような武豊を囲うしなやかな弾力の存在。そしてそれを基軸にして、170センチの長身をさらにしなやかに前傾させた躍動感ある騎乗。物事にこだわることなく淡々として自然に任せ、自らを委ねることでできる浮遊感覚……。

今年衝撃的に出現した第三の感性と才能は、従来の二元対立の構造を超えて、まるで異次元から現れた「ミュータント」が示すような新しい力を発揮している。



武豊は、真実の芸術を目指した巨匠スタニラフスキーが記した通りに、常に自然を眼前におき、「演技している(騎手という)役柄の皮膚感覚の中に入り込み」、「自分自身のメンツドを創造し」、さらにそれらを自己の中に確立している。

そんな彼を、父子の絆によって、かつての騎手武邦彦のレプリカと考えるのは、誤りだろう。ターフの魔術師と呼ばれた父のイメージを払拭して、武豊は、新しい時代に似合う称号を与えられるべきなのだ。

騎手にとって、競馬は厳しすぎるものである。しかし騎手は、競馬という日常性を離れた言わば虚構の現場で「勝利」することによってしか、自己を確認することも、まして他者に認知されることもない。さしあたり武豊は、いかに恵まれた環境にあるとは言え、眼前のチャンスを「勝利」によって確実に自らのものとし、さらにチャンスを大きくした。それが、新人最多勝利記録更新の歴史的快挙へとつながったのである。

武豊は、騎乗のとき透明なゴーグルを使わないと言う。彼はいつも濃い色のゴーグルを使用するのである。

「僕の顔の表情を、他の騎手にも、ファンにも見られたくはないんです。本当の自分はいい加減な奴だから、騎乗でも、生活でも、本当の自分を見せたくはないんです。」

18歳にして、ここまで徹切る武豊のプロ精神に、率直に敬意を表したい。やはり彼は、異次元から現れた「ミュータント」なのだろう。

秋の夕暮れどき、武豊は、さりげなく自己主張した彼の愛車Be-1の前で、遠くを眺めるように言った。

「騎手は、僕にとって誇り得る職業です!!

新人最多勝利

新人最多騎乗

新人最多賞金

新人重賞連覇

新人最短クラシック騎乗

以上が11月16日現在、武豊が達成した記録である。